

「吉原」は大衆の裏面史眠る街

増山雄三

終戦直後の昭和二十一年（一九四六年）、GHQの要求で「公娼制度」が廃止され、私
が大学二年生だった昭和三十三年（一九三八
年）には、菅原通済という国会議員が提案し
た「売春防止法」が全面施行されたが、警察
がその地域を赤い線で囲った「赤線」と名を
変え、その後も売春が続いた。

江戸時代に幕府公認の「遊郭」が置かれ、
先述の赤線を経て現在も風俗店が軒を連ねる
東京の「吉原」は、四百年の歴史を持つディ
ープなエリアだが、最近は老若男女を問わず
散策を楽しむ人の姿が目立っている。

遊郭専門書店の「カストリ書房」を営む渡
辺さんが、二年前に始めた有料の「遊郭ツア
ー」には、毎月百人弱が参加するが、意外な
事に女性が九割を占めるが、水商売や風俗に

対する偏見が弱まり、女性の方が、むしろサブカルチャー的な興味を持っているからなのだろう、と渡辺さんはいう。

実際、吉原神社を訪れた二十六才の女性会社員は、「吉原といえれば近寄り難いイメージがあっただが、歴史を知って興味が湧いた事もあり、色々な文化が生まれた場所なので、一度見てみたいと思っていた」と話す。

この「吉原遊郭」は、一六一八年に幕府が人形町付近に開業したものだ。四十年後に吉原へ移転し、幕末には遊女が四千人を超えて、人身売買や性病の蔓延など負の側面があった一方、浮世絵や芝居それに歌舞伎や浄瑠璃の題材になり、花魁を巡る悲喜こもごもも描かれ、庶民に馴染深いものになった。

東京メトロの三ノ輪駅から南東に歩くと、ガソリンスタンド前に一本の柳がすくと立っているが、それは、江戸時代から遊郭の出入り口にあっただけで、遊び帰りの客がこの柳の辺りで、後ろ髪を引かれ遊郭の方角を振

り返ったという「見返り柳」といい、柳の下にある案内板には、「柳は震災や戦災による焼失などの被害をうけたが、数代に渡って植え替えられている」と書かれている。

それに、住居表示の変更で、「吉原」の名は消滅し、遊郭の跡地は「見返り柳」の南西に広がる、台東区千束の縦二百五十米横三百米の長方形のエリアに相当し、現在は、約百五十軒の風俗店とマンションやコンビニなどが混在する場所になっている。

それでも、この辺りの区画は江戸時代から殆ど変わっておらず、内部は碁盤の目だが、見返り柳から唯一の出入り口だった、「吉原大門」までの五十間道は「く」の字に曲がっていて、ここを訪れる連中の、ワクワク感を演出する効果もほどこされていた。

売春防止法施工直後の昭和三十五年（一九六〇年）、台東区が江戸時代の吉原遊郭を纏めた「新吉原史考」の序説には「この遊郭の特殊性を冷静に分析する事は、例え公娼制度

が全面的に否認された現在においてすら、あながち無意味な企てではあるまい」と記されるが、時を経て、かつての色町に対する世間の目は変りつつあり、風化が進む今こそ、歴史を見つめ直す必要があるかも知れない。

令和二年四月